

---

# Re:Scarlet Sin

屋気楼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Re:Scarlet Sin

### 【Nコード】

N2391Y

### 【作者名】

蜃気楼

### 【あらすじ】

月世界の王は宝石翁、魔道元帥キシユア・ゼルリツチ・シュバインオーグに討伐され、その生を終え復活の機会を望む。その生が終わる直前、輪廻より外れた魂が朱い月の『器』としての生を受ける。

生前の記憶もなく、生まれたにも関わらず家族は存在しない。そんな『器』としての男が紡いでいく一つの物語。

## プロローグ（前書き）

衝動書きです……ええ、衝動書きです。Fate/zero見てたら前々から書きたかった月姫のssをかきたい衝動が抑えきれなくなりまして……

## プロローグ

朱い。

そこには何を探そうと、何を求めようと朱い色しか存在せず……人も、物も。何もかもがこの朱い空間では形を成すことができない。原形を留められず、全てこの朱に溶けていく。

そんな、まるで闇のような朱にひとり、一つの魂がただ、ただ何もできずに闇を揺蕩<sup>たゆた</sup>う。

ジブンハ……ダレナノダロウカ……？

誰にも聞こえない。誰も聞いてなどいない。心の声で自らに疑問を問いかける魂は既に『死んでしまった』男の魂であった。

輪廻転生、転生輪廻。国によってはまた別の言葉で顕されるのだろうが、人が死んであの世に還った魂が、この世に何度も生まれ変わってくるのだ。

そこに例外は無く、いかに地獄に行こうが天国に行こうがその魂はあの世で復活を待ち、やがてその魂に新たなる身体を得る。この人生のサイクルから逃れることなどできはしない。

だが、既に『死んでしまった』男の魂はあの世に行くことなく、この朱き闇の中へと囚われていた。生前の記憶はなく、自らの名前、どのようなして死んでしまったのか、家族はいたのだろうか。

答えの出るはずがない疑問ばかりが魂を揺さぶり、苦しめる。男の

魂はこの問答をもう無限のように繰り返していた。あまりにも闇へと囚われてから時間が経ち過ぎていたのだ。

そして、偶に響き渡る声。何を言っているのかすら理解できず、その声はさらに反響して魂を犯そうとするかのように苦痛を与える。男の魂はここが『地獄』なのだろうと、罪を犯した人間がその業を受ける場なのだと。感じていた。

当然と言えば当然である。記憶を失い、理解不能の声に苦しめられる。地獄と捉えてもおかしくはない。実際は大きく間違っているが、少なくとも人間の考える地獄よりもこの朱い闇は恐ろしいだろう。

不意に、魂は問答を止めた。

「ア、……………」

それは微かな、まるで断末魔のようなものだったが、たしかにそれは『声』だった。

右と左の計二本の『何か』は確かに動き、十本の『何か』は空を裂く。  
腕と指だった。

『魂』だったものは遂に動かせる機能を全て使い、立ち上がった。朱色の空間に初めての生が生まれ落ちた瞬間である。

生まれた命は既に十代後半ほどの場合によっては二十代前半にも見

られるような容姿をしている。そして、何よりも長い、腰ほどまでも伸びた無垢なる金のように美しい金色の髪。ルビーの色と同じ瞳は抉れば宝石と見紛う輝きを放つ。

男性か女性か、どちらにしても一瞬は見惚れるであろう。その人物は魂と同じ性別だった。

ようやく解放されたのか……？

ぐっ、ぐっ、と掌の感触を掴むかのように指を閉じたり開いたりするその男は真っ先にソレを疑問に感じた。その疑問に答えるかのように闇のどこからか返答が返ってくる。相変わらず何を言っているのかすら意味不明なものだったが、男にはその意味を理解することができた。

要するにこの男の身体は闇の主のモノなのだ。いつか復活するであろう朱き闇の主の『器』が男の体であり、その身体に入れられた魂が、自覚している『自分』なのだ。

だが、どうでもいい。男にとって耐えきれないほどの苦しみから解放されただけでどうでも良かったのだ。朱の主が数千年後、もしくは数万年後に男に新しく与えられた身体を『器』として蘇るとしてもどうせ与えられたものだからいつ返還しようが別にいい。その時こそは真の『あの世』に逝かせてもらえればと

朱き闇の中で初めて生まれ落ちた『命』である男は天を見上げる。いつの間にか朱は消え去り、深い黒の闇夜では妖しく輝く満月が男を見下ろすように存在していた。



## ブローグ（後書き）

更新は不定期になる可能性があります。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

## 一話 来訪 銀色の客人

ずっと、ずっと昔のことを夢に見ていた  
気がする。

未だまどろむ夢の中、男はふと思い出す。

朱の闇からの苦しみから解放され、無の存在という魂に身体を与えられ、『器』としての人生を植えつけられたその日のことを。

真祖という生まれた時から専らの吸血鬼という存在を創生する存在がこの身体の主ということ。主は月の国の王ということ。主こと『朱い月のブリュンスタッド』は宝石翁、魔道元帥など様々な二つ名を冠する”魔法使い”キシユア・ゼルリツチ・シユバインオーグに殺され、現在はこの地球上に存在しないこと。そして、『器』としての身体は主が復活するその時まで、ほぼ永遠であること。

永遠の時を生ける存在というのだから、吸血鬼を連想するだろう。だが、男は吸血鬼ではなかった。

元来、吸血鬼というのは人間という星に巢食う生命からの防衛手段のない星が、人間を律するために創り出した存在であり、ある種は『星の守り手』『自然界の精霊』という分類に区分されても全くおかしくはない。が、律するべき対象である人間の血を吸いたい

という衝動、欲望。それらは致命的な欠陥であり、その欠陥があるが故、幾年月を経ても「吸血鬼は人間を害する存在」という怪物にしか区分されず、忌むべき対象、討伐される対象にしかならないのだ。

その忌むべき対象、つまり「異端を狩る」組織である聖堂教会のとある一室で

スパアンツ！！とても小気味のいい音が部屋に鳴り響いた。厚さ5センチはあろう聖書で人間の脳天を叩きのめした音である。

聖書に叩かれた男はドシャアと顔面を木製のアンティーク調机に盛大な激突を果たし、その衝撃で机に山のように積み上げられた白色の用紙、つまりは書類が大理石の床に大きく広がり散らばった。

しかし、そんな書類など気にせず机と顔面キスをした男はハッ、と目を覚ます。ようやくの睡眠時間終了であった。

そんな様子を男を見て、書類を散らばらせた当人である女性はハア、重いため息を吐いて鼻にかけた眼鏡をクイと持ち上げた。

「大司教、お目覚めの気分はどうですか？」

最悪だな。

大司教と呼ばれた金髪紅眼の神父服の男

ゼリ

アリア・ロートシルトは口には出さず、忌々しげに呟いた。そんなことを露骨に言ってしまったら女性からも一発聖書を食らわされることをきちんとして理解しているからである。

神父は机から顔を離すと、またも心の眼でひっそりと女性を睨みつける。そして、いそいそと床に散らばった書類を拾い集めていく。無言で眼鏡の女性もそれに続いて書類を拾い集めては束に纏めて机に置いていく。作業効率は誰の目にも明らかに女性の方がよく、神父はどんくさいといわれても言い返せないだろう、鈍重な動きだった。少々眠気が抜けきっていないという理由もあるが。

ばん。集めた最後の書類の束を男が机に置くと、またもそこには白い書類でできた高層ビル。

今度は神父がため息をつきたくなった。ふと、女性を見ると瞳と瞳が合う。その眼鏡の奥が語っていた

「早く仕事しろよ、コラァ」

誰か助けてくれ……。

心底神父は願ったが、生憎と救援に来る人間などいるはずもない。別に彼女とロマンス的な展開を求めていたわけではないのだが、中々に酷い。

教会組織に所属していながらも無信仰者であるくせに大司教という教会組織でもかなり高位に役職につく神父は今まさに懺悔をしたら救われるかな、とわけのわからない事を考える。

そんな破戒僧ことゼリアリアはなんだかんだ言いつつ（心の中で）も書類に向かう。そのほとんどは討伐許可願い。つまりは『異端殺しの願書』だ。

それに黙々と判子を押し、サインをするゼリアリアは複雑な心境をかつては抱いたものだ。異端が異端殺しの許可を出すなんてこれほど滑稽なことはない。それも異端の祖の生まれ変わりと言ってもいい存在が。

ばん、ばん、ばん、ばん、さらさらさら。判子を押ししてはサインの繰り返しをする神父に眼鏡にシスターの恰好をした聖書を抱える女性には影ながら感心する。

普段は食べる、寝る、女性聖堂騎士団員を口説く、ヴェステル弦楯騎士団団長であるリーズバイフェ・ストリンドヴァリと教会内で延々と続く追いかっこをする。もしくは修道院に居る孤児たちと遊ぶ事ばかりしているまるで大司教という立場を理解していない人間かと思ったら、机に縛りつけておけばこんなにも仕事ができる人間なのかと。

山積みになされた書類はどんどん減っていき、その顔は真剣そのもの。元々が端正な顔立ちなために真面目な表情をしていればそれなりに映える。その顔に少々見惚れる、シスター・リリスはゼリアリア・ロートシルトという男の補佐役になってからそこまでの日は経っていないが、やはり能力があるのにそれを生かしきらない人間は勿体ない、と改めて感じた。そして、いつの間にか書類の山は全て右肩側に寄せられ、全て完了したということが見受けられた。

「ふう、終わったよ。リリス、悪いがコーヒーが何か淹れてくれ。少々疲れたよ」

笑顔でそう言い放つゼリアリア。「疲れた」という割には疲労が全く顔に浮かび上がっていない。ただ、精神的に疲れたのは確かだ。いつも通りに眠そうな欠伸をして、背伸びする神父に一言、お疲れさまでした。と言うとシスター・リリスは部屋を出て、給湯室へと向かった。

と、思ったらがちゃりと木製の重いドアを開けてばつの悪そうな表情で扉の横から顔だけを出して戻ってきていた。

「あー、ロートシルト大司教？」

「んー、どうかしたの？ …… ああ、別にインスタントでも構わないよ。特に拘り<sup>くだわ</sup>なんて持つほど難儀な性格もしてないし、アレはアレでうまい。泥水なんて言うヤツの脳みそと舌が腐ってるだけだから特に何の問題も「カレンちゃんが来てるんですよっ！ …… 早く言ってくれ」

何度も復読している聖書をぱたんと閉じて、ゼリアリアがドアへと向かうとようやくリリスが一礼して姿を消した。代わりに現れたのは銀色の髪の少女。瞳は金色で小柄だが、どこか恐ろしい……いや、これはゼリアリアの個人的な考えだが。

「遅いですね。ゼリアリア・ロートシルト大司教。私をシトーに捨てたことの恨み。一生忘れませんよ」

「ソレ、前も言ったぞ……。そして俺も前に言ったことを言わせてもらう。俺は傍に女を置くつもりも、ましてや幼女趣味なんてものは  
「！」

言いかけた直後、ゼリアリアは反射的に横へと反れた。もちろん危険を察知したからであり、その危険は血のように赤く染まった布だった。それがつい数秒前にゼリアリアが居た位置にまるで意思を持つかのように異様な動きで飛んできたのだ。

一見すれば本当にただの赤い布だが絶対<sup>絶対</sup>に何かの魔術的要素が含まれているに違いない。でなければあのカレン・オルテンシアが使用するはずがない。額に冷や汗を少々かくゼリアリアはひとまずアレ

に捕獲させることだけは絶対にマズイと確信していた。

「ちつ。なんで避けるのですか？ 大人しく捕まっけてくれれば一生下僕にして差し上げたのに」

「オイ、俺が言うのもなんだが、今聖職者が言うべきではない事を言ったよな？ 俺以外の人間の前では言うなよ。というか、『下僕』って何っ？ 俺一応聖堂教会（こい）の結構偉い役職なんだけど！？」

「ええ、知っていますよ。だから私があなたの補佐という名目であなたの傍にいます。……しかし、その実態は私が大司教という立場の男を下僕として動かしている影の支配者」

「……もういい、何も言うな。いや、言わないでくれ。俺が悪かった」

「そうですか。と少々残念そうにするカレン。そう御覧の通りサデイストである。それも生粋の。」

元々カレンは幼いころに母を亡くし、教育もされず、洗礼も受けなかった教会の下働きのような立場で幼少期を過ごしていた。その当時から様々な教会の孤児と関わりを持っていた（仕事をサボって）ゼリアリアとはある種の縁もあり、ゼリアリア本人もカレンがどこか異質だったため、興味を抱いていた。一応結構な長い付き合いでもあり、本人の意思次第で一般教養、高等学校程度の学問を教えたこともあってカレンら教会の孤児にとってゼリアリアという存在は

義兄か先生のような存在なのだが、彼女だけは全く口調に容赦がない。ずっと幼いころから口が悪く、皮肉や毒を散々吐く。聖痕ステイクマが現れたときは一度、名門とされる修道院シトーに聖堂教会の手によって引き渡されるが、一年で退院。書類上は能力が高いためゼリアリア・ロートシルト大司教の補佐役とする。という名目だが、それに込められたゼリアリアの意思は不明である。一応、大司教権限で無理やり洗礼を与えるということもゼリアリアは申し出たのだが、カレンはその旨を断っている。これもまた理由は不明。

「さてさて、私もそろそろ行かなくてはなりません。これでも私、忙しいのでございませす」

「あー、はいはい。元気でなー。励めよ、若人わかしゅ」

投げやりな様子の神父にカレンは若干頭に來たため、赤い布『マゲダラの聖骸布』を「我ノリ・メ・タンゲレに触れぬ」呪文とともに投げつけるが、聖書を読んでいるにも関わらずひょいとあっさり避けられた。またも舌打ちをするとカレンは扉を意図的に乱暴な閉め、部屋から消え去った。

「……………相変わらず、何がしたいんだが」

あーあ、リリースもコーヒー遅いなあー。

一人ごちると聖書を空へと放り投げる。空でばらばらになるページ。それがびったりと中心で開かれ、宙を見上げる形のゼリアリアの顔

にうまく覆いかぶさる。そして、聖堂教会の大司教はまたも夢の中へと落ちて行った。

一話 来訪 銀色の客人（後書き）

ゼリアリアの身体は真祖とほぼ変わりありませんが、吸血衝動というものがありません。その代わりに太陽が出ている間はとても睡眠欲が強いです。

幼女、と言っていますがゼリアリアが長生きしているだけでカレンは幼女ではありません。十代半ばほどですかね。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

## 二話 対談 言峰綺礼

「失礼します」

厳格な声色が伝わる。直後、その主が扉を開け、その姿を現した。その人物、黒色の正装に金のロザリオを首からかけた男は入室と共に一礼。その顔を上げると感情などないような瞳と真面目な人物なのだろうと一瞬で窺わせる表情がよく見てとれた。その男、名を言峰綺礼という。

「ああ、待ってたよ。綺礼くん、随分お早い到着だね。感心、感心」人を食ったような口調で言峰に相對するのは聖堂教会大司教

ゼリアリア・ロートシルト。

ひらひらと手を宙に漂わせて、こちらへ来いと誘っているような仕草の大司教に言峰はどこか畏怖の念を抱いていた。

金色の長髪と黄金比に近い端正な顔を有した青年であるのだが、既に数百年、いや、それ以上優に生きているかもしれない。百年以上前から金髪紅眼の青年は大司教の立場に存在しているのだ。

若干の恐れを抱きつつ、言峰は大司教が片腕をつく机へと歩を進める。

「して、如何なるご用でしょうか。私わたくしに何か不手際でも有りました

なら、それ相応の罰を受ける所存にございます」

「あー、別に君の行動に何か有ったってわけじゃないんだよ。むしろ君はもの凄く良い信奉者だ。教会にもよく尽くしてくれてるし、仕事は完璧。学問の知識も申し分ない。ホント、俺なんかとは大違いだ。君の父上もそうだしね」

だつたら何の用だ。

言峰綺礼はかつて三度も部署を転々としている。『異端狩り』の最前線である代行者として活動した時期もあるが、現在は父親と同じ世界各地に散らばる聖遺物の管理・回収を任務とする第八秘蹟会に席を落ち着けている。父親ならまだしもこの見た目だけは青年の大司教に比べれば赤子にも等しい若造である自らにどんな用事があるのだろうか、心底言峰は疑問に思った。それに答えるかのように大司教は口を開く。

「別段重要な要件なわけでもない。……ただね、俺は君に興味を持つたんだ。

そんなにも満たされない表情をしている人間は初めて見たからね」

「そのようなことは

」

無いって言い切れるかい？

にやにやといやししい瞳でそう言い放つ大司教。言峰は言い返す言

葉を失った。

実際は嘘でもそんなことは無いと言い返せたかもしれない。だが、言峰綺礼はこのゼリアリア・ロートシルトという男の前では何故か嘘を吐いてはいけない。主の前では嘘言おそごとを申してはならないように不思議な威圧と戒めが言峰の吐きだす言ことを制限していた。

恐ろしい。

なんなのだこの男は……!?

見つめるルビーの宝石のような紅眼は美しい。が、それは単純な輝きの美しさではない。誰からも忌まれる残酷の色、腸はを切り裂いて舞い散る鮮血。その色を持つ瞳に言峰は恐ろしいと思いつつも引き込まれた。

言峰はその感性を瞳を閉じて振り払った。宝石の輝きではなく血の色と思い、それを美しく思う自らを嫌悪した。昔から他人とはどこか感性が違う。その事について何度も懊悩しているのだ。それを嘲笑うかの様にゼリアリアは「ククク、ク」と声を洩らす。口元からは鋭い犬歯のような八重歯がちらついている。

「クククク、いやいや、すまないね。どうも俺は人のコンプレックスを刺激するのが好きなようだ。いやはや真、申し訳ない。して、少々真面目な話になるが」

不機嫌な表情が顔に出ていたのだろうか、言峰が何かを言う前にう

ざったい笑いを止め、ゼリアリアは表情を引き締めた。

「今度の”タタリ討伐”勝率は有ると思うかい？」

「

！？」

何故いきなりそんな話になるか……

言峰はつくづくこの大司教の話の脈絡のなさを痛感した。

『タタリ討伐』とは近いうちに実行される聖堂騎士団による”タタリ”こと死徒二十七祖第十三位であり、現象。『ワラキアの夜』という別名でも呼ばれる。存在の討伐作戦である。言峰は考えるまでもない。と、即答した。

「ありませんね。聖堂騎士団とはいえども人間。現象、誰も見たことが無い存在とまで言われる死徒を倒す、ましてや滅ぼすことなどではしないでしょう」

きつぱりと断言したところではっ、と言峰は自らが放った言動を後悔した。

相手はあくまでも教会内でもかなり高位に位置する人物。世辞でも「勝てる」と言うべきだった。しかし、時間は戻らない。後悔したところで遅く、大司教の怒りが飛ぶ

なんてことは無かった。むしろ、ゼリアリアは喜ぶようにはんぱんと手を叩き、拍手をしているような様子だった。

「うん、そういう意見が聞きたかった。最近は何そん誰を捕まえて同じ質問をしても「勝てる、絶対に勝てます！」の一点張りだったからね。心からそう思っていないくても俺の立場上下手なことを言えない。だから本音をきっぱりと言える人物を探してた」

自らをわざわざ呼んだのはただの暇つぶしか……

言峰はめったに吐かないため息を重く、鉛を吐き出すかのように重く吐きだした。この大司教は様々な意味で規格外すぎる。人の上に立つ人間とは到底思えない。暇つぶしのために結果がほとんど決まり切っている問答を繰り返して自分の納得のいく答えを発する人物を探し出して、わざわざ呼び出すなんて正直有り得ない。

上に立つものは常に孤高であるべきだ。そう考える言峰にはゼリアリア・ロートシルトという男が全く理解できない。よくこんな破戒僧が大司教なんて大層な役職に就くことができたものだ。法王はもしや錯乱でもしているのではないか？ そう思うほどに。

しばらく手を叩いていたゼリアリアが拍手を止め、手を机に置くと不意に口を開いた。

「でもな。俺は例え勝てる確率がゼロパーセントでも願っていることがあるんだ。ヴェステル弦楯騎士団のずばらで可愛い団長さんにな」

「……女性、ですか。大司教が気にかけるほどの女性なら、さぞ素晴らしいのでしょうね」

まただ。また自らが言うべきでない言葉を……

この青年大司教の前では心の奥底で隠し通していることも、このままでは洗いざらい吐いてしまいそうだ。危惧する言峰だったが、少々興味が湧いてきた。

この大司教が聖堂騎士団、ヴェステル弦楯騎士団の団長という女性に何を望むのか妻を失った自分にどんな願いを伝えてくれるのだろうか。

「聞くかい？ 簡単だよ。負けてもいいからとにかく

生きていてくれ、ってな」

## 二話 対談 言峰綺礼（後書き）

何故か月姫のssなのにfateキャラばかり出るといっ……まあ、まだ原作が先なものでご容赦ください。（なにせ第四次聖杯戦争も始まっていないので）

さて、こんなss需要あるのか……次は聖盾の騎士を登場させる予定です。

感想、評価、ご意見などお待ちしています。

### 三話 幕引 終わりの始まり

タタリ討伐作戦前日。

リーズバイフエ・ストリンドヴァリは自らの所有する対吸血鬼用最終兵器、聖盾『正式外典ガマリエル』に不具合が無いが、傷や汚れは存在しないかと入念な整備をしていた。

元々人であった存在が真祖または他の吸血鬼に噛まれたことよつてその魔族と同じ存在へと変化してしまう。この魔族、教会に所属する人間は『死徒』と呼ぶ。

教会にとつて滅ぼすべき存在、人に害為す吸血鬼など様々な呼称される『死徒』には二十七の大元たる存在があり、有能な魔術師から祖となった者、元来から恐るべき力を有する吸血鬼など強大な力を持つ者どもは『死徒二十七祖』と呼ばれる。

その『死徒二十七祖』に区分される死徒十三位、それが”タタリ”である。

「タタリ」「ワラキアの夜」「存在するが誰も見たことがないモノ」「現象」。

様々な呼び名を持つその死徒は呼称通り、全く得体のしれない死徒である。それはただ、現象。自然災害のようにタタリが現出した村、町はたった一晩でその場に存在する人間の血を一滴洩らさず吸い尽し、人の存在せし場を壊滅させる。そのため、生存者は存在せず目

撃者はいない。

その”現象”であるような死徒が起こしたとされる惨劇の有り様からあくまで存在するとされるが、正体不明。誠に存在するのかすら疑わしい死徒なのである。

「……………私もそろそろ、……………」年貢の納め時”というものなのかも  
しれないな……………」

リースバイフエは天敵のような存在である金髪紅瞳が特徴の男が咳  
いていた諺ことわざを含みながら若干のため息まじりの言葉を吐きだした。  
「見えない敵ほど恐いものは無い」これも男が言っていた言葉なの  
だが、まさにその通りだとリースバイフエは思う。

死徒に対し何度も死すくいを与えている彼女だが、二十七死徒と対峙した  
ことは未だない。しかもその中でも特に異質。対峙する相手はかつ  
てないほど得体のしれない存在なのだ。

正直言つて自信など無い。部下に常に信頼される人間でありたいと  
思う女性の初めての諦めのようなものだった。

意気消沈しながら黙々と整備を続けるリースバイフエ。

すると、部屋のドアがノックされた。

「……………？　こんな時間帯に何かあったっけ？　あれ、もしかして私  
が忘れていただけで何かとても大事なことがあったのかも」

「

焦るリースバイフエ。だが、その焦りは次の瞬間全く必要無いと気  
づかされる。

「やあ、可愛い団長さん？ お元氣いー？ あれ  
ま。邪魔しちゃったかな？」

……ええ、本当に邪魔です。

扉からひよっこりと現れた男

金髪紅瞳の神父

を憎々しげに睨みつけると言葉には出さないが、毒づいた。

急用か、部下の訪問かと思っただらなせこの神父が来るのか？ おかげでガマリエルに額をぶつけてしまったではないか！

若干ひりひりと痛む額をさすりながら、リースバイフェは男に向かい合った。相変わらずの聖職者、しかも高位の職に就く人間とは思えない優男である。

「ロートシルト大司教。このような時間に如何なるご用でしょうか？ 急用で無ければお引き取り願いたいのですが」

「いや、そんなに邪険にしなくても……。まあ、確かにこんな時間に女性の部屋を訪ねるのはどうかとは自分でも思うけど……。さ、なんとなくどうしてるかなーって、思ってる」

” 時間に女性の部屋を訪ねるのはどうかとは自分でも思うけど？ 本当だ。今を何時だと思っている。

時刻は既に十二時を越し、日本でいう丑三つ時に近い。恋人でもないただの上司と部下のような関係の人間が会合するような時間帯ではない。しかも男の方は特に用もないというのに。

ヴェステル弦楯騎士団長リースバイフェ・ストリ  
ンドヴァリと聖堂教会大司教ゼリアリア・ロートシルトは犬猿の仲  
である。

……と、聖堂教会内部では一般常識のように伝わっている。

何故ならゼリアリアが公務を放棄し、来る場所が聖堂騎士団の訓練  
場だからである。実際、備え付けてある椅子で寝ているだけなのだ  
が容姿が端正なだけに寝顔はそこそこ映える。

それに釣られた女性騎士団員がそちらにばかり気を利かせてしまい、  
鍛錬になど全くならない。

それに青筋を立てた団長であるリースバイフェがゼリアリアを本来  
の仕事へと戻らせようとするのだが、生憎逃げられるので戻らない。  
そんなことがほぼ毎日続いているのだ。教会内部で騒がしいと所属  
する人間のほとんどはこう呟くだろう。

「ああ、またあの二人が追いかけてっことをしているのか……」

真面目（？）で信徒の中の信徒であるリースバイフェと不真面目で  
破戒僧のゼリアリアが相容れるはずがない。水と油のように互いを  
うっとおしく思っているに違いない。

と、教会の誰もが思っているだろうが、実際  
のところそうではない。

確かにリースバイフェはゼリアリアの不真面目な面を改善して欲し  
いと切に願っているが、別に嫌いなわけではない。むしろ好感の持

てる相手だと思っている。

人格破綻者の多い教会の中で”優しさ”や”慈しみ”という感情を持っているのは極僅か。しかも上層に行くにつれてそれらは消え去っていく。

ゼリアリア・ロートシルトという大司教は高位の人物の中で唯一、本来の聖職者らしい感情を有した存在だ。

聖堂騎士団に入って間もない頃のリースバイフェが初めてゼリアリアと会合して数時間。彼女が彼に対して抱いた印象である。当時、緊張しつつも着任の挨拶をしたリースバイフェは見た目は二十代前半、もしくは十代後半にしか見えない金髪の大司教に驚いたが、次々と用意される茶菓子や笑い話。なんだかんだで時間を共に過ごすうちに自然と緊張も無くなって、すぐに打ち解けていた。

その後も本来全くする必要のない鍛錬の指導をしたり、任務の前には必ず激励、任務成功後は労いの言葉をかけていたり、人を思いやる気持ちが窺えることが何度も有ったことをリースバイフェは覚えていいる。

聖堂教会の大司教としては有るまじきことなのかもしれないが、人としては良い存在なのだろう。最低でも信頼できる相手くらいには思っているのである。

自分の中で大司教への感情の整理が付くと、リースバイフェはハツとした。

「……もしかして、久しぶりに『頑張れ』とでも言ってくれるので



がヴェステル弦楯騎士団長リースバイフェ・ストリンドヴァリに捧げます」

月の光だけが窓から差し込む部屋の中で聖句を唄うような透き通る声が響く。リースバイフェは瞳を閉じて耳をすませた。

「  
頑張れ。絶対に帰ってその顔を俺に見せて  
くれよ」

唄が終わる。瞬間  
り合った。

二つの影はひとつに重な

数日後。

タタリが発生せし村、生存者0

ヴェステル弦楯騎士団、生存者0

ヴェステル弦楯騎士団団長リースバイフェ・ストリンドヴァリ、死亡。正式外典ガマリエルは砕かれ回収不可。

以上の結果により、”タタリ”討伐作戦：失敗。

誰もいない大司教室の机に乗った書類には簡潔な報告のみが寂しく、そして多くの空行が残っていた。



### 三話 幕引 終わりの始まり（後書き）

月姫原作から約三年前の出来事です。前日にリーズバイフエは何をされたのか……それは御想像にお任せします。

感想、評価、ご意見などお待ちしております。

## 現在の登場人物・設定

主人公：記憶なし、とにかく眠いです。の大司教。

ゼリアリア・ロートシルト

??（見た目は20代前半ほど） 歳 身長179cm 体重??  
Blood type ?

生前の記憶を性別以外を残して忘れ、その魂を気に入った朱い月が固有結界の内部で何年もかけて造り出した自らの複製と肉体を『器』として『水』である男の魂を入れ、キシユア・ゼルリツチに敗れる直前に生まれ落ちた存在。

名前はもちろんのこと偽名であり、本名は自らも不明。（名は”独奏曲”であるアリアと”王のワインとされるロートシルトから）ブリュンスタッドの名は自らに相応しくないと名乗ることは恐らく一生ない。  
生まれて間もない頃にトラフィム・オーテンロツゼ、メレム・ソロモン、グランスルグ・ブラックモアから”朱い月の息子”として扱われ、敬称は『殿下』。

朱い月に限りなく近い存在として生み出され、初めは真祖としての吸血衝動というものもあり、従者である三人のように人間を襲って血を吸っていたが、とある賢人にその行動を止められる。

人を傷つけないという心の中では想いが有りつつも外敵を排除するという衝動に負け、その賢人に襲いかかり、賢人はそれに応戦することで二人の戦闘が始まった。

真祖として最高の肉体を持つゼリアリアに対し、賢人も相当の魔術師で一週間以上の戦闘行為が止むことは無かった。（従者である三人は加勢しようとするが、戦いの規模が大き過ぎて当時の彼らでは介入することは不可能だった）

戦闘が終了する最後の夜、ゼリアリアは「月落とし」を発生させ、賢人を葬ろうとするが、何らかの方法でそれに耐える。その後、体力も魔力も尽きかけて伏せていたゼリアリアに止めを刺すこともせず、あるうことが賢人は倒れている相手に手を差し伸べた。

その数年後、人間の他人を”慈しむ心”というモノを理解したゼリアリアは他の死徒達を纏め、統制させるべく、従者である三人と別れ、友人となった賢人とともに”聖堂教会”を設立。  
その賢人は初代教皇として、ゼリアリアは大司教としてその役に就いた。

そして、教皇となった友人の魔術によって吸血衝動を抑えるため睡眠欲がとても強くなり、もはや”吸血鬼”とは呼べなくなっていた。

能力・武器（過去に使用されたもののみ）

『マール・ファンタズム  
空想具現化』

marble phantasm

後に創造されたアルクェイド・ブリュンスタッドが有するものと同

じ能力である。

具体的には数多の事象が発生する”確率”に干渉することによって、本来ありえざる事象を強引に発生させるといふもの。不可視の力によって相手を圧殺したり、真空状態、灼熱地獄、絶対零度なども引き起こすことも可能とする反則級の力。しかし、自然界から独立している存在に干渉することは不可能。

『月落とし』

名前のそのままだが、月をそのまま相手へとぶつけ粉碎するという荒技。とても単純かつ大雑把な技だが、威力は下手をすると地球をそのまま消滅させてしまうほど強力。

だが、朱い月はこの技をゼリリツチに弾き返され、ゼリアリアは初代教皇にこの技をなんらかの方法で防ぎきられたことからこの技には何か有るのかもしれない。

『妙に黒ずんだボロボロの本』

本当にボロボロでどこまでインクをこぼせばここまで黒く染まるのか！？と見た人が思わず叫びたくなるまさしくボロボロ。聖書なのかもしれない。

ゼリアリアの睡眠の際にはほぼ絶対に顔の上に被せられており、顔が隠されているため彼の寝顔をみるのはかなりレアである。

そんなアイマスク機能でも付いているかのような本だが、中身を見たものは誰一人と居なく、覗こうとしても何もかも黒過ぎて見えならしい。いったいどんな秘密があることやら……

聖盾の騎士にしてヴェステル弦楯騎士団団長。もしかしたらヒロイン候補？

リーズバイフエ・ストリンドヴァリ

??歳 身長???cm 体重?? Blood type ?

聖堂騎士団ヴェステル弦楯騎士団団長を務める女性。ゲツセバルネ枢機卿の寵児、正式外典「ガマリエル」に選ばれし、音と法律の調停者。法の奏者、など様々な呼称が存在する信徒中の信徒。

月姫原作三年前に発生したタタリの際に自ら騎士団を率いてタタリに挑むも敗北、死亡した。

聖堂騎士団入団時からゼリアリアと個人的な関わりが多く、騎士団長となった後は周囲から犬猿の仲と呼ばれるほど毎日仕事をしない大司教を追走を繰り返していたが、別に嫌いなわけではなく、むしろ人間的に言えば尊敬していた。

真面目に見えるが、ずぼらで自堕落、行き当たりばったり。そんな性格からゼリアリアからは「可愛い団長さん」と呼ばれている。かつては「団長さん」ではなく、「お嬢さん」だったためその度に顔を赤らめていた。

趣味趣向はともかく、可愛いものや美しいものに目が無く体つきも女性らしい。「男装の麗人」と呼ばれると少し気が落ちる。可愛い

女の子が好きらしい。  
パンチ力は曰く平均二トン。恐ろしいほどの力である。音楽家の腕力を甘く見るな。

能力、武器

『正式外典ガマリエル』

対吸血鬼用の最終兵器である『滅び』の純粹概念を有した概念武装。巨大な黒と銀のヴァイオリンを思わせる銃盾にして槍鍵、パイルバンカーのように様々な使用方法がある。音律を以ってあらゆる不浄を弾く正しい秩序の具現。パウロの黙示録とエジプト人による福音という二つの外典によって鍛えられた聖盾。その盾は砕かれようとも破片で魔を浄化する。

壊れた信仰心、天性のサディスト。たとえ相手が偉くても関係ありません。

カレン・オルテンシア

10 11歳ほど 身長156cm 体重40kg Blood type ?

幼い頃に母と死別し教会で育てられるが、教育も洗礼も与えられず下働きの立場で幼年期を過ごすことになる。

下働きとしての生活から約一年、教会の孤児院に遊びに来たゼリアリアと偶然仕事に出会い、異質な何かを感じ取ったゼリアリアに連れられて仏頂面ながら彼と共に短い時を話したりするなどして過ごす。しばらくたった後、カレンの希望により孤児たちを交えてゼリアリアから勉強、一般常識を学ぶ。

数年の歳月が経ち、体に聖痕ステイグマが現れると、聖堂教会の手により望ま  
ずしてシトーという森に囲まれた監獄のような場所にある名門修道院に引き渡される。

それを知ったゼリアリアは大司教権限ともいえる横暴で速攻でカレンを書類上は「ロートシルト大司教の補佐役とする」という名目で連れ戻した。（この後、ゼリアリアは反省の書類を原稿百枚以上書かされたという）

厳しく、拷問ともとれる環境から解放してくれたゼリアリアには心の奥底では感謝しているものの、信仰のためには必要なことなのだ  
つたのかもしれないという思いもあり、彼の部屋を訪れては開口一番に毒を吐くということを心の中に決めている。（父親というモノ  
を知らないカレンにとっては兄のようなゼリアリアに対する最高の  
スキンシップだと本人は思っている）

洗礼は自らの信仰によって得るものだと思っており、ゼリアリアが特別に与えるという洗礼を断っている。

現在は才能が認められつつあるため、代行者としての道を歩み出そうとゼリアリアの補佐であるリリスとともに修行中。

能力、武器

『被虐霊媒体質』

そう呼称される異能の所有者で、「悪魔」に反応しその憑依者と同じ霊障を体現する。

悪魔祓いにおいて初手、そして最大の難関とされる「隠れた悪魔を見つけ出す」段階において、自らの傷を持って悪魔を探知することができるため、大変便利であるが生傷が絶えない。

現在はゼリアリアより大司教命令でよほどの事以外では使用が禁止されている。

『マグダラの聖骸布』

「男性を拘束する」という特性を有した赤い布。主にゼリアリア捕獲道具だが、捕獲成功したことは一度もない。

まだマトモです。まだ！

言峰綺礼

30歳ほど 身長185cm 体重82kg Blood type  
B

未来の冬木教会の神父。第五次聖杯戦争の監督者であり、第四次聖杯戦争の参加者。そして未来の麻婆神父。

持って生まれた己が性に懊悩し、苦しんだ青年時代を送った。普通の人間が美しいと思うものを嫌悪し、嫌悪するものを美しいと感じる人格破綻者。

代行者として活動した時期もあつたが、自分には合わなかったのか、父親の在籍する聖遺物の管理・回収を任務とする第八秘蹟会に席を置ちつける。この頃に妻を迎え、子を為すが妻とは死別している。子の行方は不明。

過去にゼリアリアと”暇つぶし”のために対談したことがあり、彼に興味を抱くも恐れを感じていた。一方のゼリアリアからは『満たされない』表情をしていると、わけわからない理由で好意的な印象を抱かれている。思えば未来の言峰がああの性格になつてしまった一端をゼリアリアは担っていたのかもしれない。

## 大司教補佐役

シスター・リリス

24歳 身長164cm 体重43kg Blood type A

本名リリス・アストレア。若くして大司教であるゼリアリアの補佐を務めるシスター。

メガネをかけていて一見キツイ印象を受ける美人だが、思考は柔軟であり、仕事以外では良く笑顔を見せる。

才能があるくせにそれを活用しない人間が嫌で、ゼリアリアには本当にあと少しきちんとして欲しいと切に願っており、時折彼が恐れる行動を取ることもある。

元々、聖堂教会の書庫の司書をしていた女性であり、膨大な本の蔵された書庫の75%以上、全てタイトルから内容まで脳内に記憶している能力のとても高い女性である。

戦闘能力は皆無に等しいが、その知識を生かして代行者になるべく修業中のカレンの師として活動している。



## 現在の登場人物・設定（後書き）

この分だとシオンがヒロインに浮上する可能性が高くなってきました……登場していませんけど。

感想、評価、ご意見などお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2391y/>

---

Re:Scarlet Sin

2011年11月16日01時16分発行